

# No. 1277

カメラルポ

## 成田空港その後

5月20日開港された新東京国際空港（成田）は、開港して1ヶ月半、数々の問題を起しながらも、一応国際空港として運航を続けている。しかし、一般の見学者や、送迎者の入場は依然、シャツアウト。明るく広々としたロビーも、ガラんとしたまま、警備の者だけが目立つ。見学者を対象とした土産物売場は閑古鳥、やっと開港したものの、ほとんど売れない。都心から遠いためか、タクシーを利用するお客が少なく、ポーターもトバッチリを受け、まったく当てがはずれ、一個200円の荷物にありつくだけでも大変。同じなげきはタクシーにもある。開港後、新空港に入ったタクシーは128社。300台がターミナルビル前に列を作る。が、都心まで軽く一万円は越すところから、バスの利用者が多く、朝8時頃ターミナルに車をつけ、午後5時ごろまでお客ゼロの時もある。数々の問題が発生する中で、騒音は特に日ごとに深刻化している。騒音区域指定の甘さ、民家の防音工事のお粗末さがクローズアップされ、空港反対運動にまで発展しようとしている。飛行機が家の真上を飛ぶというある住民は「飛行機が飛ばないうちは本当に静かだった。どこかへ移る計画だが、まだ見つかっていない。」と力なく語る。7月2日、開港後初の『飛行阻止現地総決起集会』が三里塚第一公園で行なわれた。

戸村一作反対同盟委員長は「今後とも廃港に追いやるまで体をはって頑張ろう」と呼びかけた。空港周辺では過激派のゲリラ活動で一時は航空機の運航にも支障が出た。

周辺のデモ行進では、一部、規制中の機動隊と衝突、50人が逮捕された。

数千人の警備陣が常時配備される“異常な空港”の新東京国際空港。今日も反対派のしかけた黒煙が滑走路の先端に広がる。使い古された言い方だが、やはり、話し合いでの解決しか、残されていないようだ。